

## 松下国際財団 研究助成

## 研究報告

【氏名】 井上 治

【所属】 京都大学大学院文学研究科

【研究題目】 近代日本における芸道の「国民文化」化— 芸道の「近代性」と「社会性」—

## 【研究の目的】

茶道・花道をはじめとする芸道は、室町中期に成立して以来、日本における伝統文化の中核を為してきた。この芸道に関する研究においては、これまで中世および近世の芸道文化についてのものが中心であり、明治維新以降の近代日本における芸道の展開に関する研究はほとんどない。しかしながら近代以降の日本において芸道が果たした役割は、決して小さくない。中でも社会的側面における展開、とくに茶道や花道をはじめとする伝統芸道が「国民文化」として位置づけられる過程は、芸道史においても日本近代史においても重要な論点を内包している。本研究では、明治維新以降の茶道および花道の展開を、「国民文化」化という観点から考察する。それによって、これまでほとんど論じられることの無かった芸道の「近代性」および「社会性」を明らかにする端緒としたい。

## 【研究の内容・方法】

明治四年(1871年)、江戸時代には江戸を中心に隆盛した花道流派である古流の四代家元関本理恩は、その弟子に「近年世柄悪しく、一年ましに世上窮迫いたし、為に旧冬より当春にいたりても宅の稽古一人もなく、出稽古も漸く十人ばかり」と書き送っている。また裏千家『円能齋宗匠略伝』にも、「斯道の不振と、父又妙齋の放漫なる処世法が禍を為して、日常の生活にも事欠き、債鬼四集するの状態で、それに反し、一家を支ゆるの収入は殆んど絶無であつた」とある。このように、茶道・花道をはじめとする伝統芸道はともに明治維新以降、深刻な不振に陥っていた。

この傾向に変化が現れるのは、急速な西欧化に対する反動が目立ち始める明治二十年代である。明治二十一年(1888年)には政教社から雑誌『日本人』が刊行され、「所謂日本の国粹は、美術論的の観念に存在す」という議論が展開されるとともに、茶道・花道をはじめとする伝統芸道の女子教育への導入も図られた。この風潮の中で再活性化した茶道・花道は、ともに国粹的な傾向を強めていく。大正十四年(1925年)に池坊より刊行された『帝国華道讀本』では、花道を「国粹芸術」と位置づけ、同書を「国定教科書」に準えている。また茶道においても、大正十一年(1922年)に「松殿山荘茶道会」を創設した高谷宗範は、「我茶道は皇室中心主義と為し、歴代列聖の詔勅

に恪遵し、之を奉行して、我精神を振作し、国民の思想を醇化し、皇室を翊戴し奉り、以て茶道経国の目的達成を期す」と主張していた。

本研究では、明治二十年代以降ふたたび勢いを盛り返す伝統芸道とくに茶道・花道の諸流派が、「国民文化」としての価値を主張することによってその正当性を訴えた点に注目し、このような「近代性」がいかなる論理で中世・近世の芸道思想と接続し、また断絶するののかという問題を考察した。

#### 【結論・考察】

明治期における芸道の復活は、二重のコンプレックスに支えられた復活であった。それは一方では「物質上の文明については欧米に三舎をさげなければなりません。されば精神上の文明については、彼らに超越するところがなくてはなりません」(『花道池坊指南』)というような西洋に対するコンプレックスであると同時に、他方では日本の近代知識人に対するコンプレックス、換言すれば「遊芸」と見なされる事へのコンプレックスであった。高谷宗範の茶道経国論も近代数寄者の代表者高橋箒庵の「趣味としての茶道論」に対する反駁であったし、池坊専威も「世人は往々にして風流風雅と言へば、謂うところの有閑人士の領するところのものと見做して、これを軽視する傾きがある。しかし華道の風雅を断じて有閑に同じいものと視てはならない」と述べて共同体主義的な花道哲学を展開した。この過程で、個人的・求道的なものであった芸道の修養的要素は、国民道德的・修身的な色彩を強めていくのである。